

【査読付き投稿論文】

台湾における日本統治時代の神社の再建と地域社会 －各アクターにとっての「鹿野神社」の位置付け－★

神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程 野口 英佑

要旨

2015年、台東県鹿野郷龍田村で、日本統治時代に日本人移民村で建てられ、戦後まもなく取り壊された神社が、中央政府の地方機関の主導により、「鹿野神社」として再建された。本稿では、宗教施設としてではなく、各集団を象徴し、政治的な意味をも含有する「遺産」として復元された鹿野神社に対して、地域社会における各アクターが有する多面的な捉え方を明らかにしようと試みた。その結果、龍田村に流入してきた時期によって構成される3つのコミュニティが、各コミュニティの由来や背景の違いによって、既存の政治的権力を視覚化するものとして位置付けたり、村内政治における台頭の機会として位置付ける場合もあれば、特別な意味を持たない場合もあることが明らかになった。それは、日本統治時代の神社の再建が「親日台湾言説」で説明できないことを示すと同時に、台湾社会において地元住民が遺産に対して意味を見出すメカニズムを明らかにするものである。

1. はじめに

1.1 問題背景

国民党馬英九政権時代の2015年10月、台東県鹿野郷龍田村で、戦後まもなく地元住民によって取り壊され、土台部分のみが存置していた日本統治時代の神社が再建された。戦前は多くの日本人移民が住んでいたこの地において鹿野村社と呼ばれ、日本人移民の心の拠り所となっていた神社が再び姿を表したのである。鹿野村社は、中央政府の地方機関である交通部観光局花東縦谷国家風景区管理处（以下、^{ゾングアンチュー}縦管処^{注1}）によって、「鹿野神社」として再建されたのだが、行政主導で再建が推し進められた端緒や経緯の説明については拙稿（野口，2021）に譲るとしたい。本稿では、筆者が中国語を用いて行った聞き取り調査^{注2}で得た情報や、筆者が利用申請を行った上

★本稿における中国語のカタカナルビについては、平凡社「中国語音節表記ガイドライン [メディア用]（最終調整日 2011/7/20）」http://cn.heibonsha.co.jp/media_simplified.pdf（アクセス日：2020年1月21日）を参照。

注1) 縦管処は、台湾東部の鹿野郷を含む15の郷・鎮に跨る管轄地域内の観光資源と自然生態系を守り、観光事業の発展を担う政府機関である。

注2) 聞き取り調査については、2018年9月から2019年2月までの間に断続的に行った。

で収集した各行政機関や議会が保有する档案（行政文書）を用いて、鹿野神社の再建過程を論じたい。そして、龍田村の各アクターが行政主導で行われた鹿野神社の再建をどのように位置付けていたのかを明らかにしていきたい。

台湾における日本統治時代の神社の再建といえば、日本人の佐藤健一が地元住民などの協力を得て、台湾南部の屏東県で2015年に再建し、日本の神明は祀られていないものの、地元先住民の祖霊を祀ることで宗教活動を行っている高土神社の事例がある。他方、鹿野神社は日本人が考える宗教的な「神社」として再建されたのではなく、後ほどその定義については説明するが、社会的な意味を有する「遺産」として復元されたという意味合いが強い。具体的には、鹿野神社は中央政府が観光スポットとしての役割を担うことを期待し、観光政策の一環として宗教的な役割とは切り離して再建されたのである。

そこで疑問として湧いてくるのが、地元住民はどのようにして受け止めていたのかということである。日本台湾交流協会が台湾で実施した2018年度対日世論調査では、台東県が位置する台湾東部において日本に親しみを感じる人の割合は他地域よりも10%以上も低く注3)、単に、「親日」であるから日本統治時代の神社の再建を受け入れているという説明は適用できないといえよう。したがって、政策の受容者である地元住民が、どのような眼差しで、「遺産」としての鹿野神社を見つめているのかを明らかにすることが本稿の目的である注4)。

1.2 遺産の役割とオーセンティシティ

本稿におけるキー概念となるのが、「遺産」であるが、社会的な重要性という側面から見ると、アイデンティティとの結び付きが強いといわれており、個人やコミュニティ、更には国家を含めた、それぞれの集団の性格を決定付ける役割を担っている。特に台湾においては、1987年の戒厳令以降の民主化政策の一環として1994年に始められた「社区総体营造」政策により、住民たちは出自を問わず、今を生きる「地元」で他の住民と協働しながら地元に基づくアイデンティティを構築し、コミュニティへの帰属を高めることを求められてきた。そして、まさに各地域が有する遺産こそが、その「地元アイデンティティ」構築の基礎とされてきたのである。また、それぞれの遺産の意味や由来については、各集団の理解や経験によって定義される (Sofield and Li, 2003) のだが、それが「本物」であれ、「偽物」であれ、それが原初主義的な伝統であれ、構築主義的な「創られた伝統」であれ、「ほんものさ」(内田, 2020) を有している。そして、遺産に限らず、建築物や場所が有する「ほんものさ」は、観光文化学や都市地理学の世界において「オーセンティシ

注3) 「日本に親しみを感じますか (1つ選択)。」という設問に対して、「親しみを感じる (非常に親しみを感じる/どちらかといえば親しみを感じる)」と回答した人の割合が、台湾北部で73%、中部で68%、南部で68%であるのに対し、東部においては58%に留まっていた。

注4) 例えば、総統就任前には鋭い反日姿勢を見せていた馬英九も、総統就任後は外省人だけでなく本省人からも支持される「全民総統」を目指すに当たり、戦前、ダムや灌漑用の水路の整備に技師として携わり、「台湾農業の恩人」と呼ばれる八田與一の功績を讃えた記念公園を整備している。このことについて、一部の外省人から戦前の「日本」を評価していると批判を受けつつも、馬英九は、「事実を事実として論じ、恩と仇をはっきり区別する」との考えをはっきりと示していた。また、Amoe (2017) によると、馬英九は八田與一への尊敬の念を示すことで、伝統的な民進党の支持基盤である台湾南部の選挙区において安定した支持を得るための足掛かりを得ようとしていたのだという。

ティ」と呼ばれている。つまり「オーセンティシティ」とは、一般的には「本物らしさ」、「真正性」などと訳されるが、「由緒正しさ」のようなニュアンスを持っている（長谷川，2021，p. 74）。

その中で，Zukin（2010）は，オーセンティシティの，人々がその場所に根を下ろして生活を営んでいくための正当性や社会的権利を主張するツールとしての機能に着目した。ある1つの場所に対して，旧住民や新住民，そして公的部門や企業などの各集団が，自集団のアイデンティティとその場所を結びつけるようにして，その場所や建築物の意味を定義しようと試みる。その結果，最も強力にオーセンティシティとの繋がりを主張した者こそが正統な所有者として，その場所や建築物で活動する権利を獲得するのである。そして，オーセンティシティは「シンボルとしての価値を持った」建築物に付随するだけでなく，それらの建築物は「空間」を支配している証として，権力の所在を視覚化するという特徴を有しているのだという。

Zukinの議論を踏まえると，遺産が地域社会における各コミュニティの正統性と密接な関わりを持つのは，遺産に付随するオーセンティシティがその遺産との関わり方に応じて各コミュニティのアイデンティティに重みを付与するから（あるいは，箔付けするから）である。つまり，オーセンティシティとは，ある特定の場所に居住したり商業活動を行ったりする権利を主張する際に，各集団が，自分たちこそがその場所を占有するにふさわしい集団であることを示すための一種のアイデンティティに関わるものであり，各集団による権力争いの結果，その場を支配する集団の正統性が，オーセンティシティを有する建築物を通して表象されるのである。したがって，Smith（2017）が指摘するようにオーセンティシティは政治や権力に密接した概念である。しかし，これまでは遺産をはじめとする建築物を活かしたツーリズム，持続可能なまちづくりやコミュニティ運動に関する研究の文脈での議論に留まっていた。つまり，オーセンティシティの概念について一応言及されてはいるものの，分析ツールとしては十分に活用されておらず，特定の社会における景観変容に付随する政治過程や社会構造の変化を体系的に論じるためにオーセンティシティの概念を用いる試みはほとんど行われていなかったのである。

しかし，カナダのトロントにおける都市改良運動に伴う景観変容をオーセンティシティの概念と関連した概念であるジェントリフィケーション^{注5)}の観点から論じた廣松（1992）の議論を参照すると，都市や農村などの社会における景観変容の過程をオーセンティシティの観点から分析することで，事態の経緯の一般的な説明を超え，その地域における政治社会構造（各コミュニティが持つ権力・影響力の大小や関係性）やその変化の過程にまで踏み込んだ理解が可能となる。また，そのようにして同様の観点から実証的に事例研究を積み重ねていくことによって，比較研究が可能になると考えられる。したがって，試行的ではあるが，本稿ではオーセンティシティの概念を用いて鹿野神社の再建を分析し，景観変容に付随する政治過程を詳細に論じることとしたい。

その上で，台湾の文脈における遺産が持つ地域社会レベルでの政治的な側面に焦点を当てた研究に目を向けると，Chiang（2007）が「四連棟」と呼ばれる新北市の日本家屋修復事例を対象とした研究を行っている。「社区総体营造」政策における遺産としての建築物の整備について，Chiangは，行政側の外部の観光客からの評価を高めたいという思惑や政治活動における得票活動

注5) 丸山・徳田（2019）によると，ジェントリフィケーションとは，「土地利用者の社会経済的地位の上方変化」と「それに伴う建造環境の変化」である。

に結びつけたいという思惑により、建築物を通して表象される再解釈された「過去」は、複雑な政治力の影響を受けるだけでなく、地元住民の存在とも絡み合っている点を指摘している。とりわけ、植民地期における差別の象徴となるような歴史的な建築物や場所の解釈は、それら自体の物質的な見たと、文化的な文脈の狭間でなされるのだといい、そのような建築物に係る「過去」を再解釈する難しさが指摘されている。加えて、ボトムアップによる住民参加型で歴史建築の保護活動を行うことは難しく、トップダウン型の保存活動を行う中で、否が応でも、それぞれの立場の人々がポジティブな意味を持たせようとする中で、複数の解釈が生まれてくるのだという。しかし、地元住民がどのような考えや背景に基づき、そしてどのような過程を経た上で、遺産に対して意味を見出そうとしたのかというメカニズムは十分に検証されていない。

したがって、本稿では、日本統治時代の神社が遺産として再建された鹿野神社の事例を分析するために、各集団が有する遺産などの建築物や場所に対する意味付けを理解するために用いられているオーセンティシティの概念を援用することとする。その上で、中央政府の地方機関という外部の力によって、遺産として鹿野神社の再建案が「持ち込まれた」ことを受けて、後述のとおり複数のコミュニティで構成される龍田村の住民たちが、それぞれどのような解釈を行ったのかを示していきたい。そして、一義的ではない「日本統治時代の神社」に対する見方の多様性を示すとともに、台湾における遺産を巡る地域社会レベルでの政治過程のメカニズムを明らかにしたい。

2. 地域社会の各アクターと鹿野神社の再建に対するスタンス

本稿の議論を進めるにあたり、歴史的背景に基づいて重層的な移民社会を形成している龍田村の歴史を辿りながら、現在の龍田村の住民構成を確認するとともに、アクターである各コミュニティの鹿野神社の再建に対するスタンスを簡単に整理しておきたい。

2.1 戦前知識人の子孫—戦前の歴史との連続性—

長らく先住民が生活を営んでいたこの地において、本格的に開墾が行われて外来の人々が定住するようになったのは、日本統治時代になってからである。台東製糖株式会社（台東製糖）がサトウキビの生産のために、新潟県などから移民を募集して開墾に当たらせており、台東製糖の出資により建立されたのが、鹿野村社であった。第2次世界大戦が終結すると、日本人移民の多くは日本に帰国した。戦前、日本人居住区に原則台湾人が居住することは許されていなかったが、台東製糖や行政機関などに従事する一部の知識人は日本人居住区に住むことを許されていた。

現在においても、戦前知識人の子孫は、引き続き龍田村において名声と権力を誇っており、代表的な存在が、台東製糖などに勤めていた邱振郎の子である邱鈺真^{チウジュンラン}や、邱鈺真の姪^{チウユージュン}注6)の邱樹蘭^{チウシューラン}である。特に、戦前の鹿野村社を知っている邱鈺真にとっては、鹿野神社の再建は戦前の懐かしい記憶を想起させるものであり、彼は当時の姿を復元することにこだわりを見せることになる。

注6) 李元和にテキストメッセージを用いて確認（2019年10月16日）。

2.2 二次移民とその子孫—行政機関との窓口—

終戦直後に話を戻すと、日本人移民がこの地を去った後、良質な居住環境を求めて、周縁に住んでいた台湾人だけでなく、台湾西部や南部からも多くの人々が流入したのであった。彼らは二次移民^{注7)}と呼ばれ、アメリカ軍からの需要を受けて、パイナップルの生産などに当たった。彼らは、媽祖などを祀る道教的な廟である崑慈堂^{クンツータン}を建てて信仰を深めていくとともに、崑慈堂管理委員会を組織して互いの結び付きを強めていき、龍田村における村内政治を牛耳る存在へと成長していった。

この種の管理委員会は、各地域において地位や声望があり、なおかつ裕福な人々で構成され、このような村廟組織こそが村落の自治機関であると評されている(戴, 1979, p. 179; 林, 2001, p. 156)。また、外部に対して村落を代表する機関として、行政等との折衝を行い、村落全体の意見の代弁者となる存在なのだという(Leong, 1925, p. 197)。実際、崑慈堂も龍田村の公廟に位置付けられており、管理委員会のトップである主任委員を務めているのが、二次移民の子世代の代表的人物である陳建光^{チェンジェングアン}である。陳建光は地方議会議員に相当する鹿野郷民代表を歴任し、鹿野郷民代表副主席も務め、鹿野郷長の座を狙えるほどの実力者であるが、鹿野神社の再建については、「そこに神社があったから再建されたまでだ」と語っており^{注8)}、日本統治時代の龍田村の歴史にゆかりの薄い二次移民たちにとって、鹿野神社の再建はあくまで他人事であるといえよう。



写真1 崑慈堂
筆者撮影 (2018年11月15日)

2.3 新移民—「よそ者」集団—

再び、龍田村の移民史に目を向けると、二次移民の流入後も龍田村に押し寄せる移民の波が止まることはなかった。1960年代以降の台湾社会は近代的商工業社会への転換を遂げ、農村から都市への人口流出が問題になると同時に、都市でホワイトカラーとして生活するのではなく、農村での生活を楽しみたいと考える人々も見られるようになっていた。そのような状況において、龍田村においても、美しい自然環境と日本統治時代の名残で整備された街並みに魅了されたIターン移住者やUターン移住者の流入が現在まで続いており、彼らは新移民と呼ばれている。なかで

注7) 旧日本人移民村の花蓮県吉安郷永興村を事例とした黄佳蓉(2008)の研究で二次移民という言葉が使われている。永興村では龍田村と同様に、戦後日本人移民が去った直後に日本人移民村の周縁に住んでいた人々が流入し、続いて台湾西部など他地域からの移民が大量に流入してきたのだという。そのように戦後初期に流入してきた移民を黄佳蓉は二次移民と呼んでいる。また、龍田村を取り上げた別の記述(臺東縣後山文化工作協會, 1996)においても、戦後初期に流入してきた人々は二次移民と呼称されており、本稿でも二次移民という言葉を使用する。

注8) 陳建光談(2018年12月18日)、崑慈堂にて。以下、陳建光が語った内容については全てこの聞き取り調査に基づいて論じるものとする。

も、李元和^{リウエンホ}は、1975年から龍田村に住み、蝶々を生かした村おこしを目的として活動する龍田胡蝶保育協会の理事長を務めている。

外来の新移民たちは、李元和を中心に、龍田村に馴染むために積極的に地域活動に参加しようとしている。その結果、戦前知識人の子孫とは、環境保護という共通の価値観に基づいて、協働する場面が多く見られるが、概して保守的であり村内政治を司っている二次移民たちとの雪解けは進んでいないのが実情のようである。このような状況下において、鹿野神社の再建が行われることになるのだが、新移民にとって、自分たちの生い立ちやバックグラウンドの観点から見れば、二次移民たちと同様に無関心であってもおかしくないが、新移民は、非常に高い関心を持って向き合っていくこととなる。

以上、龍田村においては、地元住民と一口にいっても、龍田村に流入してきた時期によって、戦前知識人の子孫、二次移民とその子孫、そして新移民と3つのコミュニティが存在しており、鹿野神社に対するスタンスも様々であることが窺える。では、次章において、それらの各コミュニティが鹿野神社の再建過程において、具体的にどのように関わっていったのかを見ていくこととしよう。

3. 鹿野神社の再建過程における各アクターの関わりと行政の対応

鹿野神社の再建については、2000年頃から地元自治体である鹿野郷公所や、鹿野郷で地域おこしを担うNPO法人に位置付けられている仙人掌郷土工作室などが検討を重ねていたものの、いずれも実現せず^{注9)}、2011年頃から縦管処の第5代処長を務めた陳崇賢^{チェンチョンシエン}が中心となって推し進めた事業である^{注10)}。台湾中部の南投出身の二次移民の言葉を借りれば、「神社は(陳崇賢)処長がやって来て作った^{注11)}」ものである。いわば地元住民や地元自治体による内発的なものではなく、行政のなかでも中央政府の地方機関の主導による外発的な形で鹿野神社は再建されたのである。では、その再建過程において、龍田村の3つのコミュニティがどのようにして関わっていったのかを時系列的に見ていくとしよう。

3.1 行政と地元住民の折衝

まず、外部の行政機関の主導による神社再建事業とはいえ、地元住民の理解が肝要であると考えた陳崇賢が交渉相手として選んだのが二次移民たちであった。鹿野神社の台座部分は戦前から残存しているものであるが、戦後、二次移民が鹿野神社のすぐ隣に、先述のとおり崑慈堂を建て

注9) 仙人掌郷土工作室廖中勳総幹事談(2018年10月19日, 11月16日), 玉米的窩民宿にて。行政院農業委員会水土保持局台東分局職員談(2018年11月16日), 行政院農業委員会水土保持局台東分局にて。臺東縣鹿野郷公所檔案發文字號: 觀技字第0920039518號, 九三雄鼎營字第〇一七號, 九三雄鼎營字第〇一八號, 九三雄鼎營字第〇二八號, 檔號: 093001007, 093001036, 093003092, 「台東縣鹿野郷龍田村「龍田神社再造計畫」會勘紀錄」。臺東縣鹿野郷民代表會檔案 檔號: 0092/302/1/1/104, 0092/302/1/1/118, 0092/302/1/1/179。

注10) 陳崇賢談(2018年12月17日), 臺東航空站にて。以下, 陳崇賢が語った内容については全てこの聞き取り調査に基づいて論じるものとする。

注11) 男性地元住民談(2018年12月18日), 崑慈堂にて。

て、宗教活動を行っていたのである。陳崇賢から見れば、崑慈堂には地元住民の多くが参拝に訪れる場所であり、崑慈堂の入口付近に龍田老人会があることからお年寄りが集まって会話を楽しむ空間でもあった。さらに、老人会の建物の隣に建っている龍田社区発展協会^{注12)}は、龍田村の発展を目指して地元の有力者たちが会議を開いて計画を練ったりするほか、選挙の際には投票会場になっていた。したがって、陳崇賢は崑慈堂周辺がこの地域における政治活動において非常に重要な場所であるという認識しており、崑慈堂管理委員会を組織する二次移民たちを交渉相手として選んだのだという。

陳崇賢は長年行政に携わって大きな事業を動かしてきた経験をもとに、地元住民との対話においては決して「私がやりたい」とはいわずに、各々の立場から様々な意見を持っている地元住民自身が「私たちがやりたい」といい出すような状態を作り出すことに注力した^{注13)}。地元の有力者と話を付けておけば、「私たちがやりたい」といった手前、他の住民から反対意見などが上がってきたとしても、有力者たちが反対勢力を抑えてくれるであろうと考えたのである。実際、崑慈堂管理委員会は陳建光をはじめとする龍田村の有力者で構成されており、陳崇賢の見立てに誤りはなかったといえよう。

話し合いの結果、二次移民たちは、鹿野神社の再建を受け入れることになったものの、彼らにとって、先述の陳建光の発言から分かるとおり、鹿野神社はあくまで崑慈堂の「隣に存在している」ものに過ぎなかった。というのも、二次移民とその子孫は、龍田村において、崑慈堂における信仰で繋がり、崑慈堂管理委員会が有する村廟組織としての政治的権威に由来する彼らのオーセンティシティを主張しており、従来より村内で高い存在感を示している。つまり、崑慈堂こそが、二次移民たちの団結の象徴であり、彼らの持つ権力を視覚化するものなのである。したがって、二次移民たちが、これ以上、鹿野神社の再建に対して積極的な関与を見せることは無かった。

以上、陳崇賢は二次移民たちと話し合いの場を持って、地元住民からの一応の合意を得ることができた。その後、陳崇賢は、彼の前職において、ともに台南の八田與一記念公園整備事業を手がけた実績を持つ郭中端^{グオジョンドワン}が率いる中冶環境造形顧問有限公司（以下、中冶^{ジョンイエ}）に依頼して鹿野神社の再建計画案を作成してもらった。こうして、鹿野神社の再建に大きな道筋が付いたところで、陳崇賢は退職し、鹿野神社の再建事業は、次の洪東濤^{ホンドンタオ}処長に引き継がれることになるのであった。

その後、「鹿野神社の復原および周辺環境改善工



写真2 鹿野神社と崑慈堂の金炉
筆者撮影 (2017年11月15日)

注12) 社区発展協会とは、1980年代に政府の行政命令によって設置が進んだ、各社区の発展を目指す組織である。村里行政区域と社区はほとんど一致しており、1つの村の範囲と社区の範囲は一致するケースが多いが、なかには2つの村で1つの社区を形成しているケースもある。龍田村の場合、村と社区の範囲は一致している。

注13) 陳崇賢によると、長年の経験により、まずは地元住民と一緒にお酒を飲むなどして、本題である自らが成し遂げたい政策とは関係の無い話をして良好な関係を築くことが、地元住民自身の「私たちがやりたい」という声を引き出すためには肝要であると考えていたのだという。

程^{注14)}」の事業名称で検討が進められていた鹿野神社の再建事業は、最終的に、2014年2月19日に施工業者との契約が完了し、中冶の設計に基づいて「鹿野地区龍田自転車道公共サービス施設改善工程^{注15)}」の名称で、事業が行われることが確定した。工程内容を見れば、①神社本体の修復工程、②周辺景観設備および植栽工程、③自転車施設およびガイド・解説設備工程となっており、この鹿野地区龍田自転車道公共サービス施設改善工程が、鹿野神社再建事業を含有することは明確であるが、事業名称から「鹿野神社の復原」という文言が削除され、一目見る限りでは神社再建事業とは分からない「鹿野地区龍田自転車道公共サービス施設改善工程」という名称に変更がなされたのである。

これらの変更については、2012年6月5日に当時の陳崇賢処長が司会を務めて開催した報告会において、龍田村の日本建築の修復および再利用については、サイクリスト向けの休憩所整備計画と関連付けた計画を立てること、観光ガイドや解説といった内容の案内標識を設置すること、また計画の名称を必要に応じて修正することなどが提言されており、この時の議論を踏まえた検討がなされた結果であると思われる。陳崇賢自身は鹿野神社の再建は「観光のためである」と確固たる信念を持っていたため、「日本軍国主義の賞賛にあたるのではないか」などといった批判は全く恐れていなかったと語っていたものの、台湾においても批判の対象となる可能性のある鹿野神社の再建を実現させるために、政策的な調整を行っていたことが窺える。

3.2 着工後の地元住民による抗議活動

以上のような慎重な検討に加えて、鹿野神社の土地所有者である鹿野郷公所との調整などを経て、鹿野神社再建事業は、ついに「鹿野地区龍田自転車道公共サービス施設改善工程」の名称で2014年2月24日に着工を迎えた。しかし、着工を迎えた矢先の3月、鹿野村社で唯一残存していた台座の基礎部分の消耗と破損が想定以上に激しいことが明らかになった。したがって、当初の予定通り台座の補修を行うだけでは将来的な安全性と耐久性を担保できないとの見通しから、中冶は現存する台座を取り壊して新たに建て直すことで安全性と耐久性を高めることを縦管処に対して提案するとともに、設計計画の変更が完成するまで工事は一旦中断することになった。程なく施工品質の検査が行われたのだが、施工状況について特段問題は見られず、台座の基礎部分を破壊しなくても補強すれば良いのではないかという新たな提案もなされ、結局当初の計画どおり現存する台座を残して社殿を再建させる可能性が高まっていった。そのような時、縦管処にとっては予期せずして、5月12日に龍田村民から鹿野神社の台座の取り壊しに反対する、以下の内容の陳情書^{注16)}が提出された。

一、この神社の台座は歴史的な意義を有しており、こうして貴処によって神社が新たに再建

注14) 鹿野神社復原與周邊環境改善工程

注15) 鹿野地區龍田自行車道公共服務設施改善工程

注16) 括弧内の内容については筆者が補足説明のために加筆している。交通部觀光局花東縱谷國家風景區管理處檔案「堅決反對龍田村日據時代神社基座拆除乙案」。

されることとなり、この村の住民たちはみな大喜びしております。

二、貴処が新たに再建計画を立てて、日本統治時代の神社の景観とイメージの再生に努めていることは、歴史と文化伝承の面で意義があり、観光客が足を止めて訪れることが期待される歴史文化的な観光スポットにもなるでしょう。だからこそ、現存する台座を取り壊すことは元々の歴史文化の精神と意義の喪失を招いてしまいます。

三、(現存する)台座を基礎として、文化資産である(他の)日本統治時代の建築物を参考にして、台湾東部の日本人移民の信仰を保存する歴史的な観光スポットを建造していただきたいと存じます。したがって、台座の取り壊し、古跡の破壊に断固反対いたします。ご検討のほど、よろしく願いいたします。

四、また、(現在の計画における)鳥居の位置は、元々(鳥居が)存在していたとは場所とは一致しません。貴処には時期をみて会議を開き、検討していただきたく存じます。

陳情書を提出するに当たり、まず、鳥居の位置にこだわっていたのが、戦前知識人の子で、戦前の鹿野村社の姿を知る邱鈺真である。彼の記憶の中の鹿野村社の鳥居の材質と設置場所が、再建計画における鳥居とは異なっていると考えていたのである。また、台座の脇にあり、神道において神聖なものとして扱われている「榊」^{注17)}の保護を訴えており、日本統治時代を体験し、郷土史の研究も行っている邱鈺真にとって、鹿野神社の再建は単なるハード面の「復元」ではなかったといえよう。戦前知識人の子孫である邱鈺真や姪の邱樹蘭にとって、戦前からの流れを汲む歴史的背景に基づくオーセンティシティこそが、現在の龍田村においても名声と権力を誇る所以であり、鹿野神社は彼らのルーツと権威を象徴し得るものである。

一方、台座の取り壊しに対して、最も積極的に抗議活動を行った人物といえるのが、新移民の李元和である。彼は、鹿野神社の再建について全く聞かされておらず、再建工事が着工して、鹿野村社の台座の周りに工事用の柵が立っているのを邱鈺真とともに目にしたことで、鹿野村社で工事が行われることを初めて知ったのだという。そして、当時、李元和は同じく日本統治時代の建築物である鹿野区役場の修復活動を主宰しており、その工事の関係で話す機会があった郭中端から、鹿野神社の再建工事の実施と台座部分が取り壊される見通しであることを耳にした。こうして、李元和は台座が破壊されてしまうのであれば鹿野神社が歴史的意義を失うことと同義であるとの考えを持つようになり、抗議活動を行うことを決めた。また、鹿野村社の台座部分には鹿野郷公所によって中国式の涼亭(東屋)が1980年以降に建てられており^{注18)}、李元和自身は長らく台座の上に重たいコンクリート製の涼亭が立っていたのだから、それよりも軽い木造の社殿を建てたところで安全性や耐久性に問題はないと考えていたのだという^{注19)}。

この時点で縦管処としては台座の取り壊しを正式に決定していた訳ではなかったが、縦管処は

注17) 再建に当たり、「榊」(台湾固有の榊の一種である森氏紅淡比)は保護されることになったものの、再建後に襲来した台風の影響で倒れてしまったとのことで、現在は無い。鹿野郷公所洪飛騰職員談(2018年11月15日)、台東県鹿野數位機会中心にて。

注18) 廖中勳談(2018年10月19日)、玉米的窩民宿にて。

注19) 李元和談(2019年1月18日)、鹿野区役場にて。以下、李元和が語った内容については全てこの聞き取り調査に基づいて論じるものとする。

陳情書で提起された要求に基づいて、2014年5月26日、崑慈堂に龍田村民を招いて住民説明会^{注20)}を開催した。内容としては、まず、鹿野神社に神様を祀るかどうかにあつての議論がなされたが、この点については地元の宗教信仰の問題であるとされ、地元の歴史文化研究者および専門機関の考察を待って、祭祀活動の要否については地元で対処すればよいとの見解が示された。縦管処としては、この事業は鹿野村社を建て直すという、あくまでハード面へのアプローチであることを明確に示したのである。そして、鹿野村社は龍田村の特色と精神を有しているということも双方が確認の上、縦管処は龍田村の意見を尊重してそれらを優先的に採用するという意向を示し、地元との共通認識が得られるまでは敷地内に立ち入って工事を再開しないことを明言した。

したがって、縦管処としては着工前の非公式な二次移民たちとの折衝に加えて、陳情書の提出を受けて、公式な住民説明会を開催して新移民や日本統治時代の知識人の子孫も含めた龍田村民と意見交換を行い、地元の理解を得られるように努めてきたのである。しかし、住民説明会当日の2014年5月26日と翌日27日に、縦管処としては想定外な内容で報道がなされてしまった。5月27日に作成された縦管処内部の文書^{注21)}においては、各新聞上の関連記事を切り抜いて保存するとともに、それらの新聞記事に対する縦管処担当者のコメントが残されている。

縦管処が報道の内容について問題視したのは、龍田村民を交えた住民説明会において縦管処と地元住民との間で共通認識を得たはずだったにも関わらず、報道においてはそのことに対する記述がほとんど無かった点である。加えて、報道において、縦管処は当初修復のみで対処する予定で台座部分の強度不足が明らかになったのは想定外であったことは一切報じられていなかった。また、計画見直し後においても台座の破壊が決定事項ではなかったこともほとんど報じられておらず、「台座の取り壊しが決定事項であるというのは住民の誤解であった」ということを報じていたのは、新浪新聞のみであった。「地元の意思を確認せずに鹿野村社の台座を壊そうとするなど、元の姿を復元させることをあまり重要視していない縦管処と、台座の破壊を食い止め、更には鳥居の位置に対しても積極的に意見を出して、より正確な歴史検証を求める熱心な地元住民」という構図の報道が大勢を占めていたのである。したがって、龍田村民の立場に立った報道が目立っており、これらは縦管処にとっては不本意な報道のされ方であったといえよう。

では、縦管処にとっては不利ともいえる報道がどうしてこれほどまでたくさん出てしまったのだろうか。その理由の1つについて李元和によると、彼はこのような住民説明会は報道陣を呼んでこそ「意義」があると考えており、住民説明会に顔なじみの記者を呼んでいたのだという。それでも、顔なじみの記者だけでなく、テレビ局の取材も来ていたことは李元和にとっても驚きだったという。それ以上に、住民説明会の主催側の縦管処職員は報道陣が来ること自体を全く想定していなかったようで、報道陣の姿を目の当たりにした縦管処職員は、どうして報道陣が来たのかと苦笑いを浮かべていたのだという。では、李元和が考える報道陣を呼ぶことの「意義」とはどのようなものだったのだろうか。まず、報道陣が住民説明会の内容を全て記録しているため、縦管処職員が李元和をはじめとする地元住民から出された提案を拒否することが極めて難しくなったのだという。さらに、李元和の顔なじみの記者が取材していることで、李元和らの意図に沿っ

注 20) 「鹿野地区龍田自転車道公共サービス施設改善工程」神社整修設計説明及鳥居設置地點協調會

注 21) 交通部觀光局花東縱谷國家風景區管理處檔案 檔號：103/22202/05/2/1。

た報道が出ることを期待していた。そうなれば世論は龍田村民側に傾き、縦管処は台座を取り壊さないことに同意せざるを得なくなってしまうと考えていたのである。つまり、報道を活用して世論を味方につけることで自分たちの希望を実現させることこそが、李元和にとっての「意義」だった。

住民説明会の前後では報道の内容も相まって混迷を極めた状況であったが、事態は収束の方向へと向かっていく。6月18日に龍田村民側から改めて縦管処に対して陳情書が出されたが、その内容は台座部分を取り壊さないという条件付きで地元住民も鹿野村社の修復に同意するという意思を示したものであった。これを受けて縦管処も6月23日には、中冶が作成した設計変更案に基づいて、台座全体の新たな建て替えおよび台座表面の全面的な塗装を見送り、元の姿を保存するために部分的な補修のみで対処する方針を決定したのである。その上で、7月9日に鹿野郷公所において、洪東濤処長が司会を務めて鹿野郷公所と龍田村民に対する説明会^{注22)}を行い、最終的に、これらの説明を受けた龍田村長らが縦管処が台座を破壊しないのであれば工事をできる限り早く再開してほしいとの意向を示したことを受け、10月になって、ようやく正式に工事再開が決定した。ここで興味深いのは、当初の台座取り壊しに反対する陳情書においては、李元和や妻の謝曉香^{シエシアオシアン}、更には林義隆^{リンイーロン}や張鉦榮^{ジャンジェンロン}^{注23)}といった新移民コミュニティの中心人物が、陳情書の上段に署名をしていたものの、今回の修復に同意する陳情書においては、李元和は陳情書の下段に署名を行い、謝曉香や林義隆、張鉦榮に至っては、署名さえもしていなかった。その一方で、陳崇賢と直接話をしたとされる崑慈堂管理委員会の人物は、修復に同意する陳情書にのみ署名を行っており、陳情書の提出においても、新移民と二次移民たちとの立場の違いが如実に現れているといえよう。

工事再開後は、2015年1月に龍田村民から社殿の再建のみならず、周辺環境も整備するように求める陳情書が提出されたものの、当初より石灯籠の設置や鳥居から社殿へと続く砂利道の整備などが計画されており、工期の3月までに周辺環境の整備を完成させる予定であることを縦管処から龍田村民に説明を行うことで解決するなど、比較的順調に計画は進行し、竣工後の縦管処による完成した建造物の確認作業および評価作業を経て、10月28日には除幕式が開催されて、鹿野神社の再建は完了となった。

以上のとおり、李元和を中心とする新移民は、台座の取り壊しに対する抗議活動を行った訳だが、どうしてここまで熱心に活動を繰り広げたのだろうか。陳建光は「鹿野村社再建に反対する人はいたのか」という筆者の問いに対して次のように答えている。

民主主義の台湾において、神社の再建に反対する人がいないなんていうことはありえない。もし反対する者がいるとすれば、それは神社再建自体について批判する理由がある訳ではなく、むしろ、社区^{注24)}の内部に原因があるのだ。

注22) 「鹿野地区龍田自行車道公共服務設施改善工程」神社整修設計説明會

注23) Iターン者の林義隆やUターン者の張正榮らは、環境保護に対する価値観を李元和と共有した上で、無農薬・無肥料農業を謳う秀明自然農法に従事しながら、李元和とともに積極的に村おこしを行っている人物である。

注24) 龍田村において、「社区」と「村」の範囲は一致しているため、ここでは「村」と同義。

つまり、李元和が熱心に抗議活動を行っていた表向きの理由は、日本統治時代の神社の歴史的意義を守るという点にあったのかもしれないが、本当の理由については、龍田村の「台湾の縮図」ともいえる重層的な移民社会がもたらす各コミュニティ同士の関係性がその背景にあったといえるのではないだろうか。実際、陳崇賢は二次移民コミュニティの有力者の説得に成功したと感じた段階で、龍田村民に対する根回しは完了していると認識していたが、新移民らは鹿野神社の再建について了知していなかった。また、陳崇賢が二次移民コミュニティの有力者に期待していた、他の住民からの反発を抑えるという役割は機能し切れていなかった。

かねてより、環境保護などの共通の価値観を有する新移民らは独自に村おこしに取り組んでいた。しかし、陳建光は、多くのボランティアに頼り、ビジネスとして成立していない李元和のやり方では活動の担い手自身がお金を稼ぐことができず、村の経済状況を改善することにも繋がらないと批判しており、新移民コミュニティと二次移民コミュニティの対立が浮き彫りとなっていたのである。徳田（2020）は外来者が自治会や町内会等に大挙して地域での合意形成に大きな影響力を発揮することを旧住民で構成される地元のリーダー層が警戒する場合があると指摘しており、概して保守的である二次移民たちが新移民に対して警戒心を抱いている側面があると考えられる。

したがって、李元和をはじめとする新移民は、鹿野神社に隣接している崑慈堂の管理に関わっている訳ではなく、戦前の日本人移民村の歴史と自らの出自が関係を有している訳でもないが、自分たちが「蚊帳の外」として進められていた鹿野神社の再建事業について、爪痕を残すべく抗議活動を行ったのである。そして、最終的にはメディアを利用して、自分たちを戦前知識人の子である邱鈺真と並ぶ「郷土の歴史や文化を重んじる住民」として位置付け、龍田村の内外で存在感を示すことに成功した。実際のところ、当初縦管処も台座を取り壊す予定は無かったが、工事の途中で強度不足であることが判明したために、一時的に取り壊される可能性が浮上しただけであった。それにもかかわらず、再建後の除幕式に関する報道においては、「もともと取り壊される予定であった鹿野神社が、地元住民が過去数年間にわたり保存活動を熱心に行った結果、再建が実現した」という形で報道された。そして、地元住民としてインタビューを受けている新移民が「我々は勇気を持って歴史を直視している」と語っているのが、その最たる例ではないだろうか。したがって、台座を補修する形で再建された鹿野神社は、郷土の歴史や文化への理解を示した上で積極的に地域活動に関与しようとする新移民のオーセンティシティが視覚化されたものであるといえよう。

3.3 地方議会議員としての面子

実のところ、前述の3つの陳情書のその全てにおいて、二次移民コミュニティに属し、当時鹿野郷民代表を務めていた陳建光らが、代表の立場として最上部に署名を行っていたのである。陳建光の話聞く限り、新移民の李元和と対立しており、陳情書に署名することには矛盾が生じるように思われるが、実はそうではない。

前述のとおり、陳崇賢は地元住民の理解を得るために二次移民たちとの折衝を行っていたが、

それと同時に鹿野郷公所とも折衝を行っていた。鹿野村社の土地は鹿野郷公所が所有権を持っていたため、土地の使用許可を得るためにも陳崇賢は当時の林金真^{リンジンジェン}郷長と交渉したのである。交渉の結果、鹿野郷公所にとってやりたい事業ではあるが、資金が無くなかなか実行できていなかった緑美化事業を、神社再建と抱き合わせて縦管処が行い、更には、政治家ゆえに選挙のためにも政治的功績を作る必要がある林金真郷長に手柄を全て与えることで合意したのであった。実際は縦管処の陳崇賢が林金真郷長に持ちかけた鹿野神社の再建事業だったが、形式上は「鹿野神社の再建を含めた観光事業は縦管処が主導したのではなく鹿野郷公所が発案したものである」という形がとられることになった^{注25)}。

その上で、洪東濤処長によると、歴史的建築物の保護に熱心な地元住民の声を受けた鹿野郷公所は鹿野郷民代表会の同意を得た上で、縦管処に提案したことで再建工事を行うことができたのだという。つまり、鹿野郷民代表である陳建光らの力が無ければ、鹿野神社の再建を実現させることはできなかったという構図になっているのである。陳建光にとって、二次移民の子としてというより、鹿野郷民代表として、新移民をはじめとする龍田村民の声を吸い上げて、新移民よりもより一段高いフェーズで政治的権力を用いて、鹿野郷公所や縦管処の間の調整役としての役割を十分に発揮していることを示すためにも、陳情書への署名は必要であったと考えられるのではないだろうか。

4. 終わりに

したがって、最終的には紆余曲折がありながらも、それぞれのアクターが、それぞれの立場における面子を保ちながら、鹿野神社の再建は実現されたのである。また、最終的には、観光スポットである鹿野神社において、日本統治時代に祀られていた開拓三神（^{かいたくさんじん} 大国魂命、^{おおくにたまのかみ} 少彦名命、^{おおなむちのみこと} 大己貴命）などは祀られず、社殿の中には1枚の鏡のみが設置された。この鏡には、「拝む」対象は自分自身であり、あらゆる事柄の一切の理由は自身にあることを自覚して、自分自身と向き合うという意味が込められているのだという。したがって、鹿野神社において表立った祭祀活動は行われなかったというので、大きな批判を受けることはなかった。縦管処にとって、新移民らから抗議活動が行われたことは予想外ではあったものの、最終的にはそれをも利用して、当初陳崇賢が描いていた、本当は縦管処が主導してはいるものの、「地元の要望を受けて縦管処が再建する」という構図を構築した上で、鹿野神社の再建を実現させるというストーリーは見事に完成した。そして、台湾東部の山側地区の観光産業を発展させることがミッションの縦管処にとって、鹿野神社はあくまで観光スポットとしての「遺産」であった。そのため、社殿の建築においては日本の宮大工を招くなどして、本格的な「神社様の建築物」を建てることに注力した。

また、地元住民にとってみると、自身のルーツに関係のある戦前知識人の子孫は、戦前の信仰

注25) 実際、2012年3月5日に林金真郷長が縦管処に対して、龍田村に残る鹿野村社や鹿野区役場といった歴史建築の補修などを求める提案を行った文書（臺東縣鹿野郷公所檔案 發文字號：鹿郷農字第1010002251號。当該檔案のみ、2018年9月21日に、利用申請を経ずに、直接鹿野郷公所農業観光課で複製物を受領。）が残されている。また、筆者が2017年12月に縦管処にメールで質問した際にも、縦管処工務課から、鹿野神社の再建は2012年3月に鹿野郷公所が縦管処に提案したことがきっかけであるとの回答を得ている（2017年12月14日）。

活動に基づく鹿野神社の神聖性を重視した上で、かつての記憶を思い起こさせる存在として、「榊」の保護や鳥居の位置や材質にこだわって、戦前当時の姿のままに再建することを望んでいた。一方、主に戦後初期に流入してきた二次移民にとっての信仰の対象は道教であり、その宗教的かつ政治的に由来する権力に基づき、村内政治において大きな影響力を発揮しており、鹿野神社は、あくまで崑慈堂の隣に存在しているものという位置付けであった。ただし、二次移民のなかでも鹿野郷民代表を務めていた陳建光らは「地方議会議員」としての立場から、鹿野神社の再建に一定の関わりを見せていたといえる。そして、龍田村において「新参者」である新移民は、自らの存在を戦前知識人の子孫と並ぶ「歴史文化を重視する地元住民」として位置付けて、台座の取り壊しに対する抗議活動を行うことで龍田村の内外に存在感をアピールする機会を獲得した。

以上のように、一口に台湾における「日本統治時代の神社の再建」といっても、「親日台湾言説」で説明することはできず、各アクターによってその捉え方は様々であることは、本稿における檔案の活用と聞き取り調査をとおして、はっきりと示すことができたといえよう。また、それだけでなく、本稿では再建された日本統治時代の神社を遺産として位置付け、台湾社会の歴史や政策を概観した上で、各アクターの性格によって規定されるオーセンティシティの概念を用いて分析を行った。そのことにより、台湾においては往々にしてトップダウンである遺産としての建築物の整備に際して、地元住民が遺産に対して意味を見出だしていく過程を明らかにすることができたのではないだろうか。

一方、鹿野神社の再建は、中央政府の地方機関の主導によって政策的に行われたものの、本稿では、地域社会におけるミクロな分析を丁寧に行うために、台湾政治の舞台における戦前の「日本」や現在の日本に関連する政策の意味やその重要性については議論の対象とはしなかった。しかし、「親日台湾言説」では説明できない鹿野神社の再建に対して、どうして各アクターがここまで注力することになったのか（あるいは、注力せざるを得なくなったのか）、そして、日本統治時代の遺産である鹿野神社の再建が台湾社会においてどのような意味をもっているのかを明らかにするためにも、今後の研究課題としたい。

また、本稿では「日本統治時代の神社の再建」について、台湾の事例と韓国、中国や南洋群島などの事例との比較研究は行っていないが、本稿で示した枠組を用いて分析を行えば、親日度合いに基づいた通説や外交的関係といったマクロな比較研究ではなく、ミクロな観点から実施する、より各地域の現在の実態に則した比較研究に発展する可能性も十分に考えられよう。

本稿を契機として、特定のフィールドでの研究に留まっていた「オーセンティシティ」や「日本統治時代の神社の再建」といった研究が、今後、より積極的に研究分野を横断して行われることになり、新たな発見がもたらされることを期待して本稿の結びとしたい。

参考文献

〈日本語文献〉

吳文星著；所澤潤監訳（2010）『台湾の社会的リーダー階層と日本統治』交流協会

内田奈芳美（2020）「オーセンティシティのゆらぎと解釈」『地域経済学研究』第38号，日本地域経済学会，

pp. 17~26

宗教法人神慈秀明会「秀明自然農法 美しいライフスタイル」<https://www.shumei.or.jp/art2.html> (アクセス日: 2021年5月5日)

臺灣總督府文教局社會課編 (1940)『台湾に於ける神社及宗教 昭和14年度』臺灣總督府文教局社會課
陳明通著; 若林正文監訳 (1998)『台湾現代政治と派閥主義』東洋經濟新報社

徳田剛 (2020)『よそ者/ストレンジャーの社会学』晃洋書房

日本台湾交流協会 (2019年11月13日)『2018年度対日世論調査』https://www.koryu.or.jp/Portals/0/culture/世論/2018_seron_shosai_JP.pdf (アクセス日: 2020年1月23日)

野口英佑 (2021)「台湾における日本統治時代の神社の再建に関する一研究—キーパーソンの働きから見る
鹿野村社の再建前夜—」『次世代人文社会研究』第17号, 日韓次世代学術フォーラム, pp. 241~263

長谷川直司 (2021)「歴史的建造物の保存・再生・活用—守るべき価値・困難な状況・求められる技術—」
『実験力学』第21巻第2号, 日本実験力学会, pp. 73~76

廣松悟 (1992)「都市政治とジェントリフィケーション—1970年代のトロント市における都市改良運動の成立と
改良派姿勢の効果を巡る一考察—」『人文地理』第44巻第2号, 人文地理学会, pp. 219~241

ホブズボウム, エリック, レンジャー, テレンス編; 前川啓治, 梶原景昭他訳 (1992)『創られた伝統』紀伊
國屋書店 [Eric Hobsbawm and Terence Ranger (eds.) (1983), *The Invention of Tradition*, New York,
Cambridge University Press.]

毎日新聞 (2011年5月9日)「台湾:「台湾農業の恩人」八田技師, 功績たたえ記念公園—台南」東京朝刊,
総合面, p. 23

丸山真央, 徳田剛 (2019)「ジェントリフィケーションとしての都市地区の変動」鯨坂学, 西村雄郎, 丸山真
央, 徳田剛編『さまよえる大都市・大阪—「都市回帰」とコミュニティ』東信堂, p. 210~231

林美容著; 松金公正訳 (2001)「台湾の民間信仰と社会組織」野口鐵郎, 奈良行博, 松本浩一編『道教と中
国社会』雄山閣出版, pp. 158~184

若林正文 (1997)『蔣経国と李登輝「大陸国家」からの離陸?』岩波書店

若林正文 (2008)『台湾の政治 中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会

Leong, Y. K. (1925)「支那に於ける村落生活」『月刊支那研究』第二巻第二號, 支那研究会, pp. 175~202

〈英語文献〉

Amae Yoshihisa (2017), "Becoming Taiwanese: Appropriation of Japanese Colonial Sites and Structures in Cultural Heritage-Making: A Case Study on the Wushantou Reservoir and Hatta Yoichi," in Hsiao M. Hsin-Huang, Hui Yew-Foong, Philippe Peycam (eds.), *Citizens, Civil Society and Heritage-Making in Asia*, Singapore, ISEAS Publishing, pp. 251-280.

Chiang Min-chin (2007), "The Hallway of Memory: A Case Study on the Diversified Interpretation of Cultural Heritage in Taiwan," <https://www.soas.ac.uk/taiwanstudies/eats/eats2007/> (accessed November 28, 2021).

Smith, Laurajane (2017), "Heritage, Identity and Power," in Hsiao M. Hsin-Huang, Hui Yew-Foong, Philippe Peycam (eds.), *Citizens, Civil Society and Heritage-Making in Asia*, Singapore, ISEAS Publishing, pp. 15-39.

Sofield, Trevor and Li, Sarah (2003), "heritage," in Jafar Jafari et al. (eds.), *Encyclopedia of Tourism*, London, Routledge, pp. 275-277.

Zukin, Sharon (2010), *Naked City: The Death and Life of Authentic Urban Places*, New York, Oxford University Press.

〈中国語文献〉

蔡舒滢「中冶環境造形顧問・郭中端」信奉近自然工法, 人做一半天做一半」<http://www.housearch.net/to/read?id=1031> (アクセス日: 2019年10月6日)

- 陳其南 (1994) 『臺灣的傳統中國社會』 允晨文化, 臺北
- 戴炎輝 (1979) 『清代臺灣之鄉治』 聯經, 臺北
- 帶路文化「阿度的店 導覽內容」 <https://www.dailoo.com/6FfeUn> (アクセス日: 2021 年 9 月 25 日)
- 更生日報 (2013 年 5 月 24 日) 「縱管處新卸任處長交接 陳崇賢大吐苦水閃辭留下謎團」 http://www.ksnews.com.tw/index.php/news/contents_page/0000412355 (アクセス日: 2021 年 9 月 26 日)
- 更生日報 (2013 年 11 月 21 日) 「鄉代會副主席陳建光角逐下屆鹿野鄉長」 http://www.ksnews.com.tw/index.php/news/contents_page/0000501452 (アクセス日: 2019 年 12 月 18 日)
- 更生日報 (2015 年 10 月 28 日) 「鹿野神社修復重現 84 年前風貌」 第 17 版
- 公視新聞網 (2015 年 10 月 28 日) 「居民發起保存抗爭 鹿野神社重建完成 20151028 公視晚間」 <https://youtu.be/Av7XBULqEsM> (アクセス日: 2021 年 9 月 24 日)
- 郭中端 (2014) 『護土親水 郭中端與她心中美好的台灣』 本事文化, 臺北
- 黃桂蓉 (2008) 「移民與永興村的形成與發展—從日本移民到客家移民」 國立花蓮教育大學鄉土文化研究所碩士論文
- 黃學堂整理 (1999) 「林錦章先生訪談錄」 『台東耆老口述歷史篇』 臺東縣立文化中心, 臺東, pp. 115~139
- 交通部觀光局花東縱谷國家風景區管理處「管理範圍」 <https://admin.taiwan.net.tw/erv-nsa/introductionErv/introductionErv07.htm> (アクセス日: 2020 年 1 月 2 日)
- 交通部觀光局花東縱谷國家風景區管理處「歷任首長」 <https://admin.taiwan.net.tw/erv-nsa/introductionErv/introductionErv05.htm> (アクセス日: 2020 年 1 月 1 日)
- 交通部觀光局花東縱谷國家風景區管理處「設立緣起」 <https://admin.taiwan.net.tw/erv-nsa/introductionErv/introductionErv06.htm> (アクセス日: 2020 年 1 月 2 日)
- 胡文偉, 本計畫團隊 (2016 年 8 月 1 日) 「龍田實踐夢想的起點站」 http://www.lrb.gov.tw/website/life_detailed/453 (アクセス日: 2019 年 10 月 17 日)
- 聯合影音 (2015 年 10 月 28 日) 「台灣首座中日合作神社落成 回到 84 年前風采」 <https://video.udn.com/news/389590> (アクセス日: 2019 年 8 月 4 日)
- 林義隆 (2009) 『種下 200% 的樂活幸福』 寶瓶文化, 臺北
- 盧思岳主編 (2006) 『社區營造研習教材—心訣要義篇』 內政部, 臺北
- 鹿野觀光休閒生活網 (2017 年 12 月 21 日) 「美好事物的起點—邱樹蘭老師」 https://www.goluye.com/portal_b1_page.php?owner_num=b1_511523&button_num=b1&cnt_id=45162 (アクセス日: 2019 年 10 月 13 日)
- 臺東縣後山文化工作協會編著 (1996) 『臺東縣寺廟專輯』 臺東縣立文化中心, 臺東
- 臺東縣政府農業處 (2013 年 8 月 9 日更新) 「張鈺榮 阿榮自然農園」 <https://efarmer.taitung.gov.tw/zh-tw/CropExperts/Farmer/37/> (アクセス日: 2021 年 5 月 11 日)
- 網住花東情養生休閒聯絡網 (2016 年 11 月 18 日) 「【在地社群】 台東鹿野龍田村 / 社區擴大經營轉為社群」 http://www.lrb.gov.tw/website/plan_detailed/421 (アクセス日: 2019 年 10 月 20 日)
- 夏黎明總編纂 (2007) 『鹿野鄉志』 臺東縣鹿野鄉公所, 臺東
- 夏黎明, 林慧珍編著 (2016) 『編織花東新想像—十四個地方創新發展的故事』 遠流, 曹永和文教基金會, 臺北
- 蕭旭岑 (2018) 『八年執政回憶錄』 遠見天下文化, 臺北
- 星樂媒體整合行銷 (2015 年 11 月 5 日) 「20151105 消逝的鹿野神社原地重建成亮點」 <https://youtu.be/wR04rcfmlLc> (アクセス日: 2021 年 9 月 24 日)
- 嚴淑女, 吳秀雲, 莊錦棟 (2014) 『「黏」在台東 12 位臺東「心」移民的故事』 遠見雜誌 (臺北), 臺東縣政府 (臺東)
- 原鄉興業企劃小組 (2016) 『片羽·永恆: 臺東縣文化資產老照片集』 臺東縣政府文化局, 臺東
- 趙川明主編 (2011) 『日出臺東: 縱谷文化景觀』 國立臺東生活美學館, 臺東
- 自由時報 (2014 年 5 月 27 日) 「〈南部〉保留基壇 鹿野神社原貌復建」 <https://news.ltn.com.tw/news/local/paper/782502> (アクセス日: 2019 年 7 月 30 日)

自由時報 (2014 年 5 月 27 日) 「〈南部〉【小檔案】鹿野神社：當年建材遭拆變賣 只剩基壇」[https:// news.ltn.com.tw/news/local/paper/782503](https://news.ltn.com.tw/news/local/paper/782503) (アクセス日：2019 年 12 月 12 日)

自由時報 (2015 年 8 月 12 日) 「牡丹復原高士神社 開箱鎮座」<https://news.ltn.com.tw/news/local/paper/906056>。

自由時報 (2015 年 10 月 28 日) 「光復後第一座與日人合作復原的神社 鹿野龍田揭幕」<https://news.ltn.com.tw/news/life/breakingnews/1489953> (アクセス日：2019 年 8 月 4 日)

自由時報 (2018 年 5 月 3 日) 「屏東「高士神社」將有台灣型男神官主掌」<https://news.ltn.com.tw/news/world/breakingnews/2414533> (アクセス日：2021 年 9 月 18 日)

〈行政文書 (檔案)〉

交通部觀光局花東縱谷國家風景區管理處檔案 發文字號：冶縱字 (101) 第 177-124 號, 檔號 101/22102/02/3/5, 103/22202/05/1/10, 103/22202/05/1/42, 103/22202/05/1/44, 103/22202/05/1/46, 103/22202/05/1/59, 103/22202/05/2/1, 103/22202/05/2/2, 103/22202/05/2/16, 「堅決反對龍田村日據時代神社基座拆除乙案」, 「鹿野鄉龍田村鹿野神社修復民眾陳情案」, 「土地使用同意書」(2013 年 12 月 5 日作成)

臺東縣鹿野鄉公所檔案 發文字號：觀技字第 0920039518 號, 九三雄鼎營字第〇一七號, 九三雄鼎營字第〇一八號, 九三雄鼎營字第〇二八號, 鹿鄉農字第 1010002251 號, 檔號：093001007, 093001036, 093003092, 「台東縣鹿野鄉龍田村「龍田神社再造計畫」會勘紀錄」

臺東縣鹿野鄉民代表會檔案 檔號：0092/302/1/1/104, 0092/302/1/1/118, 0092/302/1/1/179